

風姿花伝第三、問答条々

二 能の序破急

問、能に序破急をば、何と

か定べきや。

〔口訳〕

能に於て序・破・急を如何やうな風に定めたら良いでせうか。

答。これ易き定めなり。一

切の事に序破急あれば、申
楽もこれ同じ。能の風情を
以て定むべし。先脇の申楽

答。これは容易に定められるものである。即ち序・破・急といふものは、一切の物事にあるものであるから、猿樂の序・破・急も、一切の事物の序・破・急と何等変るものではない。猿樂に於ては、能の風情（曲目の風趣）を以て、序破急を定めるが良い。先づ脇

には、いかにも、本説正し

き事の、閑雅なるが、さの

みに細かなく、音曲も、

舞も、正しく直なる懸かり

に為べし。第一、祝言なる

べし。いかに善き脇の申楽

なりとも、祝言闕けては叶

ふべからず。仮令、能は少

し次なりとも、祝言ならば

苦しきるまじ。これ序なる

が故也。二番三番になりて

は、得たる風体の善き能を

すべし。殊更挙げ句急なれ

ば揉み寄せて、手数を入れて

能の申楽に於ては、如何にも正しい本説に取材した曲で、全体の情趣が閑雅なもの、しかもさう手の込んだものでなく、音曲に於ても舞に於ても、正しくスカリとして、素直で堂々とした風趣のものを選んで演すべきである。殊に祝言即ち「めでたい曲」であることが第一条件である。どんなに良い脇能であつても、祝言といふことが欠けては全く駄目である。たとひ曲柄は少々落ちても、めでたい曲でさへあれば脇能として差支はない。これ、脇能は、一日の演能の序であるからである。二

番目・三番目になつては、（破の段に入るから）自分の得意とする曲で、曲柄も良い能をやるが良い。殊に、最後の曲は、所謂急の段なのであるから、勢よく揉みに揉んで十分に手数を入れ細かくやるが良い。又第二日目の脇能は、前日の脇能とは變つた風体の曲をやるべきである。又人を泣かせるやうな人情味たつぶりの曲をば、第二日目の演能の中程に、十分に時機を考へて、最も効果的な時に演ずるやうにせよ。

すべし。又、後日ごじつの脇わきの申

樂には、昨日きのふの脇わきに異かはれ

る風体ふうたいをすべし。泣なき申さる樂がくを

ば、後日ごじつなんどの中ほど程ほどに、

よき時分じぶんを考かんがへて為すべし。

〔評〕

此の段は、世阿弥後年の述作花鏡の中に、「序破急の事」として一条

を設けて説いて居る所を参照して見ると興味が深い。

花鏡に於ては、序については「序は初なれば」ともいひ、「序と申すはをのづからの姿」とも言つて居る。そして「直ぐなる本説、さのみ細かになく、祝言なるが、正しくくだりたる懸かかりなるべし。態は舞歌ばかりなるべし」とその内容を規定してゐる。破については、「破は又、それ（序）を和して注する釈の義なり」とも「破と申すは、序を破りて、細こまやけて、色々を尽す姿なり」ともいつて、破といふことばに對する註解を加へてゐる。又急については、「急と申すは挙句の義なり、その日の

名残なれば、限りの風なり」とも、「急と申すは、その破を尽す所の名残の一体なり。さるほどに、急は揉み寄せて、乱舞はたらき目をおどろかす氣色なり」とものべて、急の性質を説いてゐる。我々はこの世阿弥の言を以て、花伝書の此の段を解釈すべきであらう。そして、花伝書が、花鏡に到つて、如何に精細になつたかを考へ、それと共に、時代人の能楽鑑賞力の進みと、それに応じようとした猿楽者の苦心を考へると面白いと思ふ。